

## 児童文化財を学ぶ意義に関する一考察

### ー領域「言葉」におけるモデルカリキュラムと授業実践を中心にー

島田 知和

#### A study on the significance of Learning cultural assets for children Focusing on Model Curriculum and class practice of area related to “Language”

Tomokazu SHIMADA

#### Abstracts

The purpose of this study was to clarify the significance of Learning cultural assets for children for students of the early childhood education course. From model curriculum on "Language" and review of previous study on cultural assets for children clarified the significance of learning cultural assets for children. As a result, first, it can be an opportunity to learn about children. Second, it can be to learn the essence of the fun of cultural assets for children. As a future task, it is necessary to analyze what cultural assets for children are for children from scene records of children.

**Key words :** Cultural assets for children, Area related to “Language”, Model Curriculum

#### 1. はじめに

絵本や紙芝居などの児童文化財は、乳幼児期の子どもにとって身近なものであり、保育現場において長年親しまれてきた。森上・柏女（2016）によると児童文化財とは、「子どもの健全な心身の発達に深いかかわりをもつ有形無形のもの、技術、活動などの総称。おとなが子どものために用意した文化財や子どもが自分の生活をより楽しくするために創り出した文化財がある。広義には、子どもの生活における文化事象全般。一般にはより狭義に、遊び、お話、玩具、図書、紙芝居、人形劇、音楽、映画、テレビ、ビデオなどを指す」と定義されている。また谷田貝（2016）では「子どもの成長を支える文化財。広義には、子どもに直接・間接に影響を与える全ての事象を指すが、狭義には、主に大人が子どものために用意する文化財を指す。具体的には玩具・遊具、遊び、お話、本（絵本・児童文学）、紙芝居、児童劇、人形劇、指人形、影絵、パネルシアター、ペープサート、映画、テレビ、音楽、歌などが挙げられる。」と定義されている。さらに谷田貝（2016）では「近年になってコンピューターゲームなどのニューメディアや漫画も加えられてきた。児童文化財が、保育の中で多用されていることは言うまでもない。児童文化財を利用するときは、各児童文化財の独自の歴史や特長、用途や用法を理解し、その活動が子どもにとってどのような意味があるかを常に考える必要がある」と児童文化財を保育で活用する際の留意点についても言及している。それぞれ児童文化財について広義と狭義で捉えており、広義では子どもの健全な成長を支える全ての事象を指し、狭義では有形無形を含んだ具体的なものが記載されている。

児童文化財は「子どもの健全な成長を支える全ての事象」であるため、保育者を目指す学生にとって学ぶべき内容だといえる。絵本や紙芝居も含まれていることから、特に保育内容「言葉」と密接に関係しており、保育内容の指導法や、領域に関する科目で取り扱われ、先行研究においても児童文化財を用いた多様な授業実践が報告されている。しかしながら、なぜ児童文化財を学ぶのか、

その意義について言及しているものは少ない。そこで本研究では、保育教諭養成課程研究会が作成した「モデルカリキュラム」と児童文化財を活用した授業実践に関する先行研究を概観することにより、保育者養成課程の学生が児童文化財を学ぶ意義について検討することを目的とする。

## 2. 児童文化財とは

「はじめに」で述べたように児童文化財とは広範に捉えられており、その内容は時代や社会状況の影響を受けて変化していく。表1は書籍・著者ごとに児童文化財の内容をまとめたものである。

表1. 書籍・著者ごとの児童文化財（児童文化）一覧

書籍名	著者	出版年	出版社	児童文化財（児童文化）
児童文化	中山茂	1972	朝倉書店	口演童話、紙芝居、人形劇、児童劇、子どもの歌、玩具、児童図書、絵本と童画、児童漫画、映画と幻灯、ラジオ、テレビ、児童雑誌、児童新聞
児童文化	滑川道夫 中川正文 編	1975	東京書籍	玩具（遊具）、絵本、お話・ストーリーテリング、児童文学、マンガ、児童雑誌、児童新聞、ラジオ、テレビ、紙芝居、人形劇、演劇、映画、音楽、遊戯
児童文化の研究 幼い子どもに豊かな 文化を	斎藤良輔 角尾和子 編	1987	川島書店	玩具、絵本、紙芝居、伝承遊び、テレビ（放送文化）、子どもの歌、遊び場、近所遊び
新 保育と児童文化- 保育文化をはぐくむ-	森上史朗 編	1995	学術図書 出版社	玩具、遊具、絵本、幼年童話、マンガ、紙芝居、人形劇、影絵、ペープサート、テレビ、視聴覚教材
児童文化	三上利秋	1995	教育情報 出版	絵本、玩具、児童文学、紙芝居、スライド、OHP、人形劇、影絵、エプロンシアター、パネルシアター、あやとり、折り紙、手遊び、ファミコン、マルチメディア
新訂 児童文化概論	原昌 編	2002	建帛社	図書、雑誌、新聞、映画、ラジオ、テレビ、漫画、児童劇、人形劇、影絵、紙芝居、お話、語り、玩具、遊具、音楽、舞踊
保育者のための言語 表現の技術-子どもと ひらく児童文化財を もちいた保育実践-	古橋和夫 編	2019	萌文書林	絵本、童話、紙芝居、わらべうた、童謡、人形劇、パネルシアター、ペープサート、漫画、アニメ、映画、児童演劇、おもちゃ、手遊び、折り紙、ゲーム、伝承文化
保育実践に生きる「言 語表現」児童文化財活 用のエッセンス	馬見塚昭久	2020	萌文書林	絵本、紙芝居、パネルシアター、ペープサート、人形劇、おはなし、手遊び、歌遊び、言葉遊び、劇遊び
児童文化がひらく豊 かな保育実践	中坪史典 編	2022	教育情報 出版	本、紙芝居、童謡、人形劇、エプロンシアター、パネルシアター、ペープサート、手遊び、玩具、伝承遊び、わらべうた、折り紙、あやとり、ゲーム、コンピュータ、伝承文化・年中行事、児童文化施設

これらの書籍には児童文化財がどのようにして成立し、発展したか、また子どもにとっての意味、読み方や演じ方、活用する際の配慮等が記載されている。児童文化財には保育現場ではあまり活用

されない漫画やアニメなども含まれており、それらを学ぶ意義として森上（1995）は、子どもが漫画の登場人物の影響を受け過ぎることに一定の配慮の必要性について言及しつつ、漫画と子どもの遊びの関係性や、その時代に流行した漫画を追うことによって、子どものことを考える貴重な視点になると述べている。学生たちは時代や社会状況に応じて子どもたちがどのような児童文化財に夢中となっているか、なぜ夢中となっているかについて考えることによって、子ども理解を深めていくきっかけになり得るのではないだろうか。

### 3. モデルカリキュラムから見る児童文化財

2017年告示の幼稚園教育要領の改訂に伴い、一般社団法人保育教諭養成課程研究会において「領域に関する専門的事項」と「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）」のモデルカリキュラムが作成された。作成の背景として、「平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究-幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える-」では「幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培うことから、いかにして質の高い幼児教育を展開・充実させるかは、子供の人格形成を目指す学校教育の重要な課題であり、特に、社会環境の急速かつ大きな変化や幼児教育をめぐる諸課題に対応する中で、幼稚園教育の質保証をするためには、幼児期の学校教育を実践していく専門家としての資質能力を検証しつつ、幼稚園教諭の養成段階から現職段階への一貫した理念のもとで人材育成することが不可欠である」と記載されている。近年の幼児教育・保育への関心の高まりもあり、保育者養成課程における学習内容についての議論・検討がなされている。

児童文化財についても領域「言葉」を中心に記載されており、以下「領域に関する専門的事項」と「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）」のモデルカリキュラムにおける児童文化財に関する記載を示す。

#### （1）「領域に関する専門的事項」 幼児と言葉

##### 1）モデルカリキュラム

###### 全体目標

当該科目では、領域「言葉」の指導の基盤となる、幼児が豊かな言葉や表現を身に付け、想像する楽しさを広げるために必要な専門的事項に関する知識を身に付ける。

##### （1）言葉のもつ意義と機能

###### 一般目標

人間にとっての言葉の意義や機能を理解する。

###### 到達目標

- 1）人間にとっての話し言葉や書き言葉などの言葉の意義と機能について、説明できる。
- 2）乳幼児の言葉の発達過程について、言葉の機能への気付きも含めて説明できる。

##### （2）言葉に対する感覚を豊かにする実践

###### 一般目標

言葉に対する感覚を豊かにする実践について理解する。

###### 到達目標

- 1）言葉の楽しさや美しさについて、具体的な例を挙げて説明できる。
- 2）言葉遊びなどの言葉の感覚を豊かにする実践について、基礎的な知識を身に付ける。

3) 言葉の楽しさや美しさに気づき、言葉を豊かにする実践を、幼児の発達のと合わせて説明できる。

(3) 言葉を育て、想像する楽しさを広げる児童文化財

一般目標

幼児にとっての児童文化財の意義を理解する。

到達目標

- 1) 児童文化財(絵本・物語・紙芝居等)について、基礎的な知識を身に付ける。
- 2) 幼児の発達における児童文化財の意義について理解する。

下線は筆者加筆

2) 考えられる〈授業モデル〉 (該当箇所のみ抜粋)

3) しりとりやなぞなど等、言葉に対する感覚を豊かにする言葉遊びを体験するとともに、言葉遊びと幼児の言葉の発達との関連を考える機会を設ける。

4) 絵本・物語・紙芝居などの児童文化財の中に描かれている幼児の姿を読み解くことで、幼児理解を深めるとともに、幼児にとっての児童文化財の意義を考える機会を設ける。

5) 絵本・物語・紙芝居などの児童文化財を実際に読んだり、演じたりすることで、その楽しさを体験的に理解し、保育への取り入れ方を具体的に話し合う。

下線は筆者加筆

(2) 「保育内容の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)」 保育内容「言葉」の指導法

1) モデルカリキュラム

全体目標

領域「言葉」は、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」ことを目指すものである。幼稚園教育において育みたい資質能力について理解し、幼稚園教育要領に示された領域「言葉」のねらい及び内容について背景となる専門領域と関連させて理解を深め、幼児の発達に即して、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける。

(1) 領域「言葉」のねらい及び内容

一般目標

幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本を踏まえ、領域「言葉」のねらい及び内容を理解する

到達目標

- 1) 幼稚園教育要領における幼稚園教育の基本、領域「言葉」のねらい及び内容並びに全体構造

を理解している。

- 2) 領域「言葉」のねらい及び内容を踏まえ、幼児が経験し身に付けていく内容と指導上の留意点を理解している。
- 3) 幼稚園教育における評価の考え方を理解している。
- 4) 領域「言葉」に関わる幼児が経験し身に付けていく内容の関連性及び小学校の教科等とのつながりを理解している。

(2) 領域「言葉」の指導方法及び保育の構想

一般目標

- 1) 幼児の心情、認識、思考及び動き等を視野に入れた保育構想の重要性を理解している。
- 2) 領域「言葉」の特性及び幼児の体験との関連を考慮した情報機器及び教材の活用法を理解し、保育構想に活用することができる。
- 3) 指導案の構造を理解し、具体的な保育を想定した指導案を作成することができる。
- 4) 模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている。
- 5) 領域「言葉」の特性に応じた現代的課題や保育実践の動向を知り、保育構想の向上に取り組むことができる。

2) 考えられる〈授業モデル〉 (該当箇所のみ抜粋)

- 6) オノマトペや動きを誘発する言葉の具体例を挙げたり、しりとりやなぞなぞなどの言葉遊びを体験したりし、言葉に対する感覚を豊かにする活動について理解を深める。その上で、幼児が「言葉の楽しさや美しさ」に気づくような遊びについて、指導案を作成する。
- 9) 絵本や物語、紙芝居などの児童文化財の幼児にとっての意義について、読んだり聞いたりする体験を通して理解し、保育の中にどのように取り入れるか考える。幼児の年齢や時期を考えて保育を構想し、模擬保育を実施し振り返りを行う。

下線は筆者加筆

保育者養成課程では、乳幼児期にとっての児童文化財の意義、児童文化財を活用する際の技術を実際に体験することや、指導案の作成、模擬保育によって学ぶことが推奨されている。児童文化財の意義を学ぶことが強調されている背景には、技術に加えて児童文化財を通して子どもの理解に努めること、目の前の子どもに対して、どのような児童文化財に出会ってほしいか、何を感じてほしいかについて考えることができる保育者となることが求められているといえる。

またどちらの教科目においても、児童文化財について「体験」を通して学ぶことが強調されており、実際に児童文化財に触れることで魅力や楽しさを味わい、保育で活用する際の子どもの目線に立った配慮を考えることができるのではないだろうか。

4. 保育者養成課程における授業実践

次に先行研究から保育者養成課程における児童文化財を用いた授業実践について概観する。なお幼稚園教育要領改訂後の2018年以降の先行研究を対象としている。

花房（2021）は、演習科目による模擬保育によって得られた保育スキルを、保育実習や幼稚園実習において実践ができたか、また演習科目で学んだことを保育者の専門性として、実際の保育現場でどのように役立てることができたかについて学生への実習後のアンケート調査と面談から分析している。分析の結果、調査対象である学生の多くが実習中に「絵本」を活用していることが報告されており、「絵本」を通して保育者の専門性として「言葉がけや伝える力」「ハッキリとした声量や、明瞭な発声」などが深まったことが報告されている。

松下・平嶋（2018）は、保育者養成校の学生が、大学講義内でパネルシアター、ペープサートを作成し、保育現場で子どもたちの前で実際に演じ、さらに保育者と振り返りを行うことを通して、保育の中で児童文化財を用いることで子どもにどのような価値がもたらされるのかを考察している。パネルシアター、ペープサートを通して、子どもに何を感じてほしいか、何を楽しんでほしいかなどのねらいを設定することや、児童文化財の子どもにとっての意義や指導法、教材作りについて学んだ上で作成することなど基本的なことが丁寧に報告されている。これらの基本を踏まえて、教員前でのプレ発表、学生間発表、保育園での実践とその振り返りを数回行うことで、改善点や伸ばすべき工夫点等について、子どもの視点を踏まえた修正を行なっている。

山田・圓入・古相（2019）は、幼稚園教育実習期間中における人形劇の実施前、実施後のアンケート結果をもとに、子どもの前で実際に人形劇を演じることを通して、どのような変容があるかを考察している。実施前は人形劇に対して客観的認識だったものが、実施後には主観的認識として変容しており、人形劇の技法に加えて、客席へ人形の感情を伝えるためにどのように台詞を言えば良いのか、どのように動かすべきなのかを主体的に考えられるようになったことを報告している。また子どもが人形劇の世界に引き込まれている姿を実際に体験したことで、子どもが人形劇を通して何を感じているのか、何を楽しんでいるかなど子どもの視点を深く学ぶことができたことや、人形劇の魅力に気づくことができたのではないかと考察している。

保育者養成課程では、児童文化財の楽しさや魅力、子どもと楽しむ際の保育計画や配慮などの理論的な内容について丁寧に学ぶことができる。さらに実習等も活用しながら、子どもと一緒に遊ぶことによって、子どもの反応を直接見ることの大切さや、大学教員や保育者と振り返りを行うことで、より具体的に児童文化財を活用する際の技術や、子どもにとって児童文化財とは何か学ぶことができる。実習との連続性を生かした学びは保育者養成課程において重視されており、「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準」には保育実習の目的として「保育実習は、その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする」と記載されている。大学の講義で学んだことを実習で子どもたちの前で実践し、子どもの表情や反応を直接感じることで児童文化財とは何かについて深く理解することができるのではないだろうか。

甲斐（2019）は、保育士・幼児教諭養成課程における授業「児童文化」において、児童文化財としてあまり扱いのない「アニメーション」の活用方法について、授業実践の紹介、考察を踏まえて提案している。甲斐（2019）は、アニメーションを大学の講義に取り入れることで、「映像の偏食」問題を解消したいというねらいがあり、商業アニメーションと対局にあるアート系アニメーションが児童文化財として扱うアニメーションとして適切であると言及している。アート系アニメーションについて「作家性に富み、わずかな分数の作品でも、物語の内容や素材の表現が工夫されている。念入りの企画のもとで構成され、撮影時間も充分にかけられており、非商業の立場で、映像の美的・造形的な価値を追求されたものがそれにあたる。」と説明している。授業実践を複数のSTEP別に紹介しており、アニメーションの技法や表現、アニメーション作品の鑑賞、iPhone やタブレット端末を活用したアニメーション制作の様子が報告されている。制作をした学生全体の様子として、学んだことや普段の生活で親しみのある事柄をテーマや素材に取り入れていることが報告されており、映像のあふれる現代だからこそ、学生や子どもに対して、絵が動く面白さや、より良いものを自分

の目で確かめることの大切さへの気づきを期待している。

## 5. おわりに

保育者養成課程において児童文化財を学ぶ意義として以下の2点にまとめる。

第一に、モデルカリキュラムにあるように児童文化財が、子どものことを知るきっかけとなり得る点である。児童文化財とは、子どものために作られたもの、子ども自身が生活を楽しむために創り出したものである。保育者養成課程で「乳幼児期の子どもにとって児童文化財とは何か」と本質について学ぶ段階において技術だけではなく、それぞれの児童文化財を通して大人は何を体験してほしいと願っているのか、その児童文化財はなぜ生み出されたのかについて時代背景とともに学ぶことによって、子ども観が深まっていく。そして児童文化財を子どもたちと一緒に楽しむことで、子どもが何に興味・関心があるのか、なぜ児童文化財が子どもを魅了するのかと児童文化財を媒介としながら、子どものことを理解し、子どもへの共感的な視点を養うことが学ぶ意義の一つではないだろうか。子どもたちが多様な児童文化財に出会うきっかけを保育者が作ることで、子どもの世界が広がり、また新しい子どもの一面に気づいていくといえる。

第二に、それぞれの児童文化財が持つ面白さの本質に触れることができる点である。大学の講義ではただ単に体験するだけでなく、絵本や人形劇、パネルシアター、アニメーションなどの児童文化財の特徴や演じ方、保育計画を立案する際の配慮について、まずは理論を学ぶことを大切にしている。ただ子どもを楽しませるのではなく、子どもの目線に立ち、この児童文化財の面白さとは何かについて考えながら、演じたり、制作したりすることで、より深く児童文化財の面白さや魅力を味わうことができる。そのためには実習などを通して子どもと一緒に体験し、省察することが有効であるといえる。

本研究では、保育者養成校の学生が児童文化財を学ぶ意義について検討した。今後の課題として、子どもが児童文化財とどのように関わっているのか、また子どもが生み出す児童文化財とは具体的にどのようなものがあるのかについて保育現場における子どもの事例記録を通して分析していきたい。

## 参考文献・引用文献

1. 古橋和夫 (2019) 「保育者のための言語表現の技術-子どもとひらく児童文化財をもちいた保育実践-」、萌文書林
2. 藤重育子 (2015) 「児童文化財を用いた先行研究に関する一考察」、高田短期大学紀要第33号、P.59-65
3. 原昌 (2002) 「新訂 児童文化概論」、建帛社
4. 一般社団法人全国保育士養成協議会 (2018) 「保育実習指導のミニマムスタンダード『協働』する保育士養成 Ver.2」、中央法規
5. 甲斐聖子 (2019) 「保育士・幼稚園教諭課程における授業『児童文化』の内容に関する研究-児童文化財としてアニメーションを活用する試み-」、日本女子大学大学院紀要家政学研究科・人間生活学研究科第25号、P.103-111
6. 馬見塚昭久 (2020) 「保育実践に生きる『言語表現』児童文化財活用のエッセンス」、萌文書林
7. 松下茉莉香・平嶋慶子 (2018) 「パネルシアターとペープサートの指導法についての考察-鹿児島市内の保育園における実践研究-」、南九州地域科学研究所所報第34号、P.73-90
8. 三上利秋 (1995) 「児童文化」、教育情報出版
9. 水野恭子 (2021) 「幼児との応答的な関わりを意識した模擬保育動画作成の効果 -児童文化財を用いた教材の作成と活用-」、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 研究紀要第54号、P.83-89
10. 文部科学省 (2017) 「平成28年度 幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向け

た調査研究-幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える-

11. 森上史朗（1995）「新 保育と児童文化-保育文化をはぐくむ-」、学術図書出版社
12. 森上史朗・柏女霊峰（2015）「保育用語辞典（第8版）」、ミネルヴァ書房
13. 無藤隆・保育教諭養成課程研究会（2017）「幼稚園教諭養成課程をどう構成するか モデルカリキュラムに基づく提案」、萌文書林
14. 中坪史典（2022）「児童文化がひらく豊かな保育実践」、教育情報出版
15. 中山茂（1972）「児童文化」、朝倉書店
16. 滑川道夫・中山正文（1975）「児童文化」、東京書籍
17. 齊木恭子（2018）「児童文化財の活用を考える-『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』における領域『言葉』に視点を置いて-」、鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要第76号、P.31-40
18. 斎藤良輔・角尾和子（1987）「児童文化の研究-幼い子どもに豊かな文化を-」、川島出版
19. 山田裕美子・圓入智仁・古相正美（2019）「人形劇に関する認識の変容-教育実習における児童文化財活用の取り組み-」、中村学園大学発達支援センター研究紀要第10号、P117-121
20. 谷田貝公昭（2016）「新版・保育用語辞典（初版）」、一藝社